



新橋小学校

学校だより

令和4年11月30日

令和4年度 第8号

夢みる小学校

校長 西尾琢郎

この原稿を書いているのは11月25日金曜日です。翌週月曜の28日には、かねてより予定していた映画上映会が実施されているはずですが、この映画は、「きのくに子どもの村」という変わった名前の小学校を舞台としたドキュメンタリー映画です。この学校は、およそユニークな点ばかりでできていると言ってよいほど、他では目にすることのできない取り組みにあふれた小学校です。

この学校には「先生」がいません。いるのは「子ども」と「おとな」です。この学校では多くのことが、子どもと大人がともに参加する話し合いの中で決められています。しかも、子どもと大人は、それぞれが同じ一票を持って、話し合いに臨むのです。

またこの学校には「学年別」のクラスがありません。また、教科別の授業もありません。子どもたちは、それぞれ、自分で選んだプロジェクト学習のクラスに入り、異年齢集団の中でそのプロジェクトに取り組みます。国語や算数などの基本的な勉強は、それらとは別に「きそがくしゅう」の時間と銘打った時間に集中して学びますが、その内容は、プロジェクトでの学びと、うまく連携するように計画されています。さらにこれ以外にも、クラスの枠を超えて行う自由選択学習の時間が設けられています。当たり前前の学校の時間割を見慣れた目には、「自由すぎる」ように映る、この学校のカリキュラムですが、実はこれでも文部科学省の学習指導要領に準拠しているというのですから驚きです。

この学校には、三つの基本方針があります。それは自己決定の原則、個性化の原則、体験学習の原則です。

個性化を保障する自由選択の時間はもちろん、プロジェクト学習の時間も、どちらもまず、子どもの自己決定に委ねられています。そして「きそがくしゅう」での学びは、それら子どもの選択の結果に、できるだけ紐づけるかたちで進められていきます。「自分が選び取ったこと」「自分がやりたいこと」の実現のために必要な知識や技能としてはじめて、私たちが考えるような教科が主体的に学ばれていくとされているわけです（体験学習）。

しかし実は、このような考え方は目新しいものではありません。日本でも以前から「経験主義」に基づく生活単元学習とも呼ばれて実践されてきた歴史があります。しかし、ある時点からこの考え方の対極にある「系統主義」に基づき、同一年齢の子どもたちが一律に同じ内容を学び進めていくような教育の形が主流となり、今日までその座を占めてきました。その理由は様々あると思いますが、あえて乱暴にまとめるなら、それは「効率」のためではなかったかと思います。若い労働力が「金の卵」と呼ばれ、経済成長最優先という時代の中、社会が公立学校に求めたのは、とにかく効率的に、良質な労働力として社会に貢献できる人材を育成することでした。効率を重視し、一定の学力習得を求める向きからは「這いまわる経験主義」などと揶揄され、やがて生活単元学習は、傍流であるかのように見られるようになっていったのです。

以来およそ半世紀、しかし社会は大きく変わりました。大人のだれもが確信をもって将来の社会を見通すことができなくなるなか、自ら問いを見出し、またその「答えのない問い」を自らの力で解決していこうとするような人材の育成が、いま求められています。

公教育にとって、社会の求めと無関係に教育活動を行うのは困難なことです。ですが、こうした過去の経緯を見て感じるのは、教育において最も大切なことは何だろう、という問いです。子どもの知的好奇心を喚起し、それに応える学習活動、またすくすくと成長する身体をのびやかに使って、自分の身体を思いのままに操ることができるようにしていく身体活動など、子どもの奥底からわきあがってくる思いや願いをかなえていくことこそが教育ではなかったのだろうか、と。それこそ「答えのない問い」であるかもしれませんが、保護者の皆さんや地域の皆さん、そして誰より当事者として 子どもたち自身の声をしっかりと生かしながら考え、できることから実行していきたいと思っています。

【お知らせ】

用務員の「石渡佳祐」ですが、医師から2/3までの療養が必要との診断が出ました。後任については、決まり次第お知らせいたします。ご承知おきください。